■日本小児神経外科学会役員選挙について

一般社団法人日本小児神経外科学会第 3 期理事の立候補者を公示します。
なお、役員選挙の投票期間は 2021 年 3 月 15 日から 4 月 15 日（郵送による）とします。
2021 年 2 月 20 日

一般社団法人日本小児神経外科学会
理事長　伊達　　勲
総務委員会担当理事　栗原　　淳

【信任希望理事候補】（五十音順）

理 事	赤井 卓也	富山大学医学部脳神経外科
理 事	栗原　淳	埼玉県立小児医療センター脳神経外科
理 事	下川 尚子	高木病院脳神経外科
理 事	伊達　勲	岡山大学医学部脳神経外科
理 事	埜中 正博	関西医科大学脳神経外科
理 事	藤井 幸彦	新潟大学脳研究所脳神経外科

【新任理事候補】（立候補順）

氏名 井原　　哲	所属 東京都立小児総合医療センター脳神経外科	48 歳

抱負

この度、一般社団法人日本小児神経外科学会の理事に立候補いたしました。私は、2003 年に脳神経外科専門医を取得後、2005 年より国立成育医療センター（当時）師田信人先生のご指導のもと本格的に小児神経外科の道に進みました。2009 年より筑波大学（松村明教授）での勤務を経て、2013 年からは東京都立小児総合医療センターにて診療責任者を務めております。

本会には、1999 年に入会し、2013 年より学術委員（旧評議員）、2018 年より評議員として学会活動に従事してまいりました。委員会活動では、2009 年から広報委員会委員、2017 年には広報委員長を拝命し長嶋達也理事（当時）、下川尚子理事のご指導のもと会員および一般向けの広報に従事いたしました。2019 年には総務委員長を拝命し栗原 淳理事のもとで 2 年間学会の様々な運営業務に従事いたしました。また 2017 年から「小児の脳神経」編集委員、2020 年から学術委員会シャントレジストリ小委員会、虐待関連小委員会にも関わらせていただいております。

本学会が抱える喫緊かつ最大の問題は会員数の減少と認識しております。小児神経外科は非常に魅力的な分野ですが、その魅力に接する機会を持てないまま研修を終えてしまう専攻医も少なくありません。SNS や学会ホームページを活用するなど、専攻医世代に小児神経外科の魅力を伝える広報の必要性を感じています。広報委員会での経験を活かし、新規会員数の増加に尽力したいと考えております。また新規会員が、本学会での学術活動へのモチベーションを抱くようになるには、そのロールモデルたる学術委員の活躍が欠かせません。厳しい審査を経て学術委員に就任しても学会内で十分な活躍の場がない現状があります。学術委員には各種委員会活動などを通じて十分な活躍の場を提供できるような体制を整備したいと考えております。

日本小児神経外科学会の立ち位置として、日本脳神経外科学会の分科会としてのいわば縦軸と日本小児科学会や日本小児神経学会をはじめとする小児系他診療科学会との協調関係という横軸も重要です。私は長年の基幹小児病院での勤務経験より、小児系他診療科学会をリードする人材に多くの知己を得ることができました。理事として学会の運営に関わる機会をいただけましたら、横軸の活動において貢献できるものと確信しております。

推薦者（下川尚子、栗原　淳）

氏名　朴　　永銖	所属 奈良県立医科大学脳神経外科 兼 小児医療センター	57 歳

抱負

この度、朴 永銖は、一般社団法人 日本小児神経外科学会 第 3 期役員選挙に立候補させていただきます。

私が、本学会において尽力して参りました主たる活動の一つは、韓国小児神経外科学会（KSPN）との交流です。ソウル大学やヨンセイ大学セブランス病院など、韓国における主要な小児病院での留学、短期研修を行い、多くの先生方との親交を深め、この経験は、本学会学術集会における KSPN-JSPN Joint conference の開催や、日韓交換留学プログラムによる人的交流などに大きく貢献して参りました。

また、師田信人 担当理事のもと、第 1 期、第 2 期にわたり国際委員会（旧 渉外委員会）委員長を拝命し、この間、International Society for Pediatric Neurosurgery(ISPN) 学術集会、Asian-Australasian Society for Pediatric Neurosurgery(AASPN) 学術集会や、Asian-Australasian Advanced Courses of Pediatric Neurosurgery(AAACPN) 教育コースなどへ、積極的な参加を呼びかけることにより、本学会ならびに会員の業績を世界に知らしめるために努力して参りました。

私は、Concezio Di Rocco 教授が主宰される欧州における最も活動的な小児神経外科施設である、ローマ・カトリック大学小児神経外科への留学経験もございます。当時のスタッフやレジデントは、現在、European Society for Pediatric Neurosurgery（ESPN）で中心的な役割を果たしており、Di Rocco 教授は、INI Hannover に移られましたが、ISPN の機関誌 Child's Nervous System の Editor in chief を長年務められていることは、皆さんご承知と存じます。旧知の、G. Tamburrini 教授、L. Massimi 教授は、現在 ESPN 理事の重責を務めており、Federico Di Rocco 教授は、51th ISPN annual meeting を主催されます。今後とも彼らとの交流を大切にして参ります。

臨床においては、地方医大病院に勤務する立場ですので、都市部の小児専門施設に比べますと、症例数は劣りますが、小児神経外科全ての領域において、真摯に治療に携わって参りました。

とりわけ、超低出体重児脳室内出血に対しては、発症早期よりの脳室ドレナージ管理に線溶療法を加えた独自の治療方法を考案し、海外からも高い評価を得ております。

そして、乳幼児頭部外傷に関しては、昨今、大きな社会問題になっている虐待判断について積極的に発言し、社会に大きく貢献して参りました。

今後の抱負として、培ってきた人脈を生かし、以下の四つを挙げさせていただきます。

１、KSPN との交流を、引き続き活発に行う。

２、ISPN、AASPN の一員として、国際的な視野に立って、本学会の活動を報知する。

３、新生児水頭症、特に出血後水頭症に対する機能予後改善のための共同研究を展開する。

４、虐待による乳幼児頭部外傷判断のガイドライン作成に努める。

日本小児神経外科学会のさらなる発展のため、全力を尽くす所存です。

評議員の皆様方の、ご支援ご協力を賜りますよう、切にお願い申し上げます

推薦者（師田信人、重田裕明）

氏名　五味　　玲	所属 自治医科大学とちぎ子ども医療センター小児脳神経外科	61 歳

抱負

この度、第 3 期役員選挙で理事に立候補させていただきます。

自治医科大学を卒業し地域医療に従事した後、自治医科大学大学院に入学し脳神経外科を専修したのが 30 年前の 1991 年、学位を取得し留学と派遣病院勤務を経て大学病院に戻り小児脳神経外科を専修したのがちょうど 20 年前の 2001 年です。この 20 年間、日本小児神経外科学会の多くの先輩の先生方に、施設の垣根を越えてご指導をいただきご薫陶を受け、多くの知識を得て経験を積むことができました。感謝をしてもしきれないほどです。幸い、臨床面でも研究面でもある程度の実績を残すことができました。もちろん、この間の患者さんにも心からの感謝を申し上げないといけません。

これからはその経験を、学会活動を通して、小児脳神経外科医をめざす若い先生方や、数多くの患者さんに還元していかなければならないと考えています。これまでも日本小児神経外科学会では評議員として、学術研究委員長として活動をしておりますが、さらにこれを発展して参りたいと考えます。昨年からのコロナ禍で何かと制約が多くなっておりますが、一方で Web を用いたリモート会議やセミナーが浸透したために、むしろ実現可能な企画の幅が広がったようにも思います。

脳神経外科関連のみならず小児関連の他学会との連携も積極的に行っていく必要があると思います。現在本学会からの参加という枠組みで、日本脳腫瘍学会の小児脳腫瘍ガイドライン作成に参加し、日本小児血液がん学会でも学術委員を拝命しております。今後はこのようなコラボレーションを増やしていく必要があると思います。

国際的にも日本の存在をアピールしていかなくてはなりません。KSPN や AASPN での韓国はじめアジア諸国との友好関係を保ち、さらに ISPN での発信も必須です。そのためにも全国規模での臨床研究など、日本全体が一体となったプロダクトを計画していく必要があります。

これらの事柄はもちろん一人ではできませんので、評議員・学術委員の先生方の協力を仰ぎ、推進して行きたいと考えております。よろしくお願い申し上げます。

推薦者（隈部俊宏、室井　愛）

氏名　加藤　美穂子	所属 あいち小児保健総合医療センター脳神経外科	52 歳

抱負

この度、第３期役員選出にあたり理事に立候補させていただきました。小児神経外科を専門としてきた 17 年の経験から今後取り組みたいことが五つあります。

1.　成人期医療への移行問題：小児期から成人医療への移行を促進するためには、小児神経外科疾患の正確な自然歴や予後を知ることが必要であります。現在小児水頭症に関してはシャントレジストリ事業が進んでおります。これと同様に稀少な他の疾患の自然歴や予後についても当学会主導で調査し情報発信する必要があると考えております。また、移行状況は医療施設によって差があると報告されています。小児専門施設では併設施設より移行に難渋することも明らかとなっており、小児専門施設で医療を提供している立場で問題の詳細分析と改善に取り組みたいと考えております。

2.　子ども虐待に関する問題：子ども虐待の中でも、脳神経外科医が関わる Abusive Head Trauma(AHT)は重症例が多く、致死的になることが多い病態です。実際に頭部外傷を診察し治療を担当している脳神経外科医であっても、小児頭部外傷とりわけ AHT を疑う場合には、その受傷機転を明確に説明することは時に困難です。さらに、その他の外傷に比べ AHT では神経学的予後が著しく不良である理由もはっきりとは解明できていません。小児神経外科学の中心を担う学会として、関連学会と連携しながら AHT に関する知見を正確に発信したいと考えております。

3.　保険制度への提言：稀少性や小児の特殊性により保険制度に適合困難な症例も多いことからか、まれならず意に反する審査を経験します。また地域による偏りも指摘されています。稀少・特殊ゆえに生じる診療には、保険制度に則った範囲である程度の裁量を認める必要があり、この点を学会主導で強く主張すべきと考えています。

4.　専攻医教育への介入：成人医療への移行を進める点からも、小児神経外科の魅力を伝える点からも専攻医訓練中に小児神経外科症例を経験する機会が必要です。図らずも社会状況からオンラインの活用が進んでおり、これを利用したカンファレンスなどで専攻医教育へ介入できると小児神経外科疾患の理解が進み、成人期患者の受け入れや小児神経外科への興味を引き出すことに効果的であると考えます。

5.　子どもの権利に関する啓蒙：最後に強調したいのは「子どもの権利」に関する啓蒙です。小児神経外科に携わる医師は、脳神経外科医であり、かつ小児科医のような「子どもの代弁者」であることが必要です。ただ優しいだけではなく、時には厳しさを伴った真の優しさで患児に接することができる小児神経外科医を育成したいと考えます。

推薦者（齋藤　清、師田信人）

氏名　山本　哲哉	所属 横浜市立大学脳神経外科	56 歳

抱負

脳神経外科は神経系の基本領域という大きな役割を担っています。従って私たち脳神経外科医には、神経系全体を総合的に診察し、評価し、そして治療すること、さらにそれを継続的に維持発展させるための人材育成を行うための体制が求められています。ひとりひとりの一般脳神経外科医の中に小児神経外科領域のスキルを広く普及させること、また小児神経外科に特化した専門医により、専門領域の発展と人材育成が継続的に行われることが重要であり、これらは本学会に求められる社会に対しての責任でもあると考えます。

本学会では、小児神経外科領域の学術活動として学術集会の開催や機関誌の発行、国内外の関係諸学会との連携、啓発活動を行ってきております。私も、これまで本学会が行ってきたこれら重要な活動を十分に理解し、その継続と発展に精進いたします。

小児神経外科に特化した専門医の育成については、小児神経外科を志す若手脳神経外科医に対し、本学会の活動を通じ大学間の垣根を超えて、できるだけ実現可能な、具体的なキャリアアップの機会や選択肢を示せるような活動を考えてまいります。現職での経験では、小児神経外科を目指す脳神経外科医の数は実際の専門医よりはるかに多いです。研修の機会、施設やポストの制限が制約となりますが、学会としての研修機会のデータ化や小児神経以外のサブスペシャリティーを有することで選ばれる人材開発等の可能性を探ります。小児神経外科領域のスキルの普及に関しては、ポストコロナ時代の情報共有の在り方を考え、多忙な脳外科医、子育て世代・女性脳外科医がより充実した情報に触れられるよう、考えてまいります。

小児神経外科領域において現職である大学の役割として、学術や専門教育の維持と継続性は重要です。学術は無論小児専門施設にとっても大学にとっても行われる活動ですが、全ての大学では学術活動や研究活動、大学院生の教育自体が基本的なタスクとなっており、この仕組みに乗せて小児神経外科の活動を進めて行くことで、継続的な成果と、次世代の優秀な若手の獲得に繋がっていくものと考えます。小児専門施設との協力のもと、大学での小児神経外科領域の在り方をしっかりと考えてまいります。

以上、立候補にあたり抱負を述べました。ご支援・支持のほどをいただきますよう、なにとぞ、よろしくお願い申し上げます。

推薦者（松村　明、稲垣隆介、若林俊彦）

※年齢は 2021 年 4 月 1 日現在